

『就実教育実践研究』第15巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2022年3月31日 発行

公認心理師志望学生の心理実習への モチベーションに関する研究

— 学部学生の実習での体験に関する調査を通して —

**Motivation in Psychological Practice by Aspiring Certified Public
Psychologist Students**

— A survey of experiences related to undergraduate students' practical training —

永田 忍・林 秀樹

公認心理師志望学生の心理実習への モチベーションに関する研究

— 学部学生の実習での体験に関する調査を通して —

永田忍 (教育心理学科), 林秀樹 (教育心理学科)

Motivation in Psychological Practice by Aspiring Certified Public
Psychologist Students
- A survey of experiences related to undergraduate students'
practical training -

Shinobu NAGATA (Department of Educational Psychology)

Hideki HAYASHI (Department of Educational Psychology)

抄録

学部における公認心理師カリキュラムの1つである心理実習は、見学を主とする実習ではあるものの、学内で座学を通して学んだ心理職を、彼らが将来働く現場を実際に目にして学ぶ重要な機会である。その過程において、学生は実際の心理職業務の奥深さに直面することで、将来への不安等ストレスに直面することが想定される。学生にはそのようなストレスを乗り越え、公認心理師を目指していく姿勢が求められる。そのために教員と実習施設が、学生が積極的姿勢で心理実習に取り組めるようより良い環境を提供し、彼らの心理実習へのモチベーションが何によって左右されているかを明らかにしていく必要がある。

そこで本研究では、公認心理師志望の学生が積極的に心理実習に取り組める一助になるように、心理実習を終了した学部学生に心理実習の体験についてのインタビューを行い、心理実習へのモチベーションに関わる要因を明らかにした。

キーワード：公認心理師，心理実習，モチベーション

I. 問題と目的

これまで心理系の代表的な資格は「臨床心理士」という民間資格であった。しかし、クライアントの問題を様々な観点からチームでアプローチしていく時代に移行する中、生物学的観点を持つ「医師」や「看護師」、社会学的観点を持つ「精神保健福祉士」などが国家資格であるのに比べ、心理学観点を持つ専門家のみ民間資格であるというアンバランスの解消という背景から国家資格である「公認心理師」が誕生した。今後は公認心理師が心理職に携わる者の必須資格になると思われ、公認心理師資格を志望する学生に対して教

育の質の向上がより一層求められることになる。

これまで心理職を目指す学生の教育は、その実践学的性格上、従来から座学による学習の他に演習や実習を通して実践を体験させながら学ばせるという教授方法を重視してきた。学部における公認心理師カリキュラムの1つである心理実習は、見学を主とする実習ではあるものの、心理職が働く現場を実際に目にして学ぶ重要な機会である。

しかし、学生は心理実習において想像していた以上に、他職種連携の複雑さや業務の奥深さに直面し、通常の学生生活とは異なる強いストレスに直面することが想定される。そのようなさまざまなストレスを感じながらも、心理実習という学習過程を通して、学生には積極的に心理職の実際を学んでいくことが求められる。学生が積極的に心理実習に取り組める環境を教員と実習施設が提供し、積極的に心理実習に取り組めるようにするためには、彼らの心理実習へのモチベーションが何によって左右されているかを明らかにしていく必要がある。

そこで本研究では、公認心理師志望の学部学生が積極的に心理実習に取り組める一助となるように、心理実習を終了した学生に、実習体験についてのインタビューを行い、心理実習へのモチベーションに関わる要因を明らかにすることを目的とした。

II. 方法

1. **対象者**：就実大学に在籍する公認心理師志望の3年生で、心理実習Ⅰおよび心理実習Ⅱの医療領域を除くすべての実習に参加した者で、かつ、研究の目的と倫理的配慮を口頭及び文書で説明し、研究への協力の同意を得られた者であった。

2. **調査期間**：2020年11月から12月の間に実施した。

3. **データ収集および分析方法**：対象者にとって都合の良い時間とプライバシーが保たれる場所において半構造化面接を行った。質問項目は、石川・内海（2016）の看護学生の臨地実習のモチベーションに関する研究と同様の以下の項目を使用した。①実習を通しての体験はどのようなものであったか、②実習中に達成感のあったこと、嬉しかったことはどのような場面であり、それは心理実習へのモチベーションにどう関わっていたか、③実習で辛かったことや悲しかったことはどのようなことであり、それは心理実習へのモチベーションにどう関わっていたか、④実習へのモチベーションを向上（阻害）させるうえで効果的と感じたスタッフの言動や支援、⑤実習へのモチベーションを向上（阻害）させるうえで効果的と感じた教員の言動や支援、⑥実習へのモチベーションを向上（阻害）したと思う上記以外の事柄。それらの内容をICレコーダーで録音し、逐語録をおこし、質的分析ソフトNVivo12日本語版を用いて分析した。

4. 倫理的配慮

対象者には口頭と書面にて説明を行い、書面による同意を得た。本研究への参加は自由意思で決めることができ、不参加であっても何の不利益もないことを説明した。いつでも参加の取り消しができ、たとえ参加を拒否したり、途中で撤回したりしても、今後の学業

成績には全く影響がないことを伝えた。本研究は、就実大学・就実短期大学教育・倫理安全委員会の承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

対象は9名であった。男性2名、女性7名で、年齢は20歳～21歳であった。一人あたりのインタビュー時間は平均25分であった。

分析の結果、公認心理師志望の学部学生の心理実習へのモチベーションに関わる要因として、34のテーマ、15のクラスター、5のカテゴリが抽出された(表1)。以下、テーマには〈〉、クラスターは《》，カテゴリには【】の括弧を用い、心理実習については実習と記載した。学生の実習へのモチベーションを高めた経験として、【実習で得られた達成感】、【学生を支える周囲の人々と実習環境】、【職業選択肢の増加】が得られた。逆に、実習へのモチベーションを低下させた経験として、【困難を感じる指導者、要心理支援者との関係と実習環境】、【実習に対するネガティブな感情】が得られた。

1. 【実習で得られた達成感】

学生は、実習を《人としての成長の機会》ととらえていた。見学や学外施設の実習指導者の講義を受けることを通して〈自分の変化や成長を感じる〉と感じていた。また、児童生徒との関わりを通して〈要心理支援者に対するイメージの変化〉を感じていた。具体的には、「実習指導者の先生に質問をしたら腑に落ちないところが腑に落ちた」、「頭ではわかっていたけど、実際に学んだり動いたりしてみたら全然違った」、「実習指導者に指摘されて視野が広がった」、「(心理支援を必要とする)子を色眼鏡で見ていたことに気づいた」といった発言が認められた。

また、児童生徒の言葉や態度から《要支援者と関わる中での嬉しい体験》を経験し、モチベーションを高めていた。具体的には、「実習が始まって3～4日したら、子どもたちが向こうから話しかけてきてくれた」、「話しかけると子どもたちが反応を返してくれるようになった」、「子どもの変化を直に見れてとてもよかった」といった発言が認められた。

実習を通して学生は、それまで大学で〈学んだことを活かせる〉実感と、自分の理解が不明瞭なところに気づくなど〈疑問点や課題が明確になる〉ようになっていった。また、帰ったらお気に入りの紅茶があるから頑張ろうなど〈リフレッシュするための工夫ができる〉ようになり、上手くストレスへの対処をすることで、実習の達成感を高めることができていた。具体的には、「学んだことを活かして考えられるようになった」、「学内の講義で学んだことを実習で活かすことができた」、「実習中にわからないことを質問しようと自然に思えるようになった」、「帰ったらお気に入りの紅茶があると思って頑張った」といった発言が認められた。

2. 【学生を支える周囲の人と実習環境】

教員と実習指導者が《学生が指導を受けやすい指導者》としての役割を果たすために〈温かい雰囲気づくり〉に努めたことで、学生は安心して実習に取り組んでいた。また、実習

中、必要に応じて、〈的確なアドバイス〉をはじめとして、〈学生のために時間を割く〉ことや〈自由な意見交換の場〉を作ったことが学生のモチベーション向上につながっていた。具体的には、「実習指導者の先生が頑張ってるね、と言ってくれた」、「子どもの活動に参加している時に、実習指導者の先生方の温かい雰囲気を感じた」、「実習指導者の先生が実習日誌を書いた翌日にコメントをくれた」、「実習全体通して質問の時間をしっかりとってくれた」、「先生方全員が言葉を選んでモチベーションが下がらないように接してくれていた」、「事後指導で体験したことを発表した際、学内教員が頑張ったねと言ってくれた」、「何かあったら連絡くださいと多くの教員が言ってくれた」といった発言が認められた。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響で、実習が中止となる大学があった中、教員と実習施設の実習指導者が実習実施のための調整を幾度も行った結果、〈コロナ禍で実習をできたことよる喜び〉が学生のモチベーション向上に影響していた。具体的には、「コロナ禍で実習に行けなくなると思っていた中、実習に行けた」といった発言が認められた。

この他に、〈家族等からの支援〉、〈指導者が自分を理解し指導してくれるという実感〉、〈体験を共有する仲間存在〉といった《他者からの理解》がモチベーション向上につながっていることが明らかとなった。具体的には、「アルバイト先の方から実習頑張ってるねとってもらえた」、「家族に頑張るなさいと鼓舞された」、「同じ心理師を目指す仲間の考えや意見を聴くことができたのは貴重な体験だった」、「仲間の事前・事後指導の発表がとても良い刺激になった」といった発言が認められた。

3. 【職業選択肢の増加】

心理実習は学部学生にとって現場で働く公認心理師をはじめとした心理職に出会う場でもある。そのような心理職との出会いを通して、《心理師としてのアイデンティティを形成し始める》学生が多かった。さらに学生にとってこの実習は、実際の〈心理師の働き方を知る〉ことで〈将来働きたい領域の選択肢を増やせる〉実感を持ち、〈心理師をやってみようと思える〉体験となっていた。具体的には、「実際に実習に行ってみて心理師の働き方がわかった」、「心理師がどんなふうクライアントに接しているのかが見えた」、「自分の特性を活かして働いている姿が想像できた」、「実習全部が将来につながる経験になっている」、「やっぱり心理師になりたいというモチベーションにつながった」といった発言が認められた。

表1：学生が実習でモチベーションに関わったと感じている体験

カテゴリ	クラスター	テーマ
実習で得られた達成感(4)	人としての成長の機会(2)	自分の変化や成長を感じる
		要心理支援者に対するイメージの変化
	要心理支援者と関わる中での嬉しい体験(3)	要心理支援者からの励まし
		要心理支援者に受け入れてもらえる
		要心理支援者の変化を間近で見られる
実習という学習過程を通じた達成感(2)	学んだことを活かせる	
	疑問点や課題が明確になる	
	ストレスへの対処法の獲得(1)	リフレッシュするための工夫ができる
学生を支える周囲の人と実習環境(3)	コロナ禍における実習(1)	コロナ禍で実習をできたことによる喜び
	学生が指導を受けやすい指導者(5)	温かい雰囲気づくり
		学生のために時間を割く
		自由な意見交換の場の確保
		的確なアドバイス
		的確な指示
	他者からの理解(3)	家族からの支援
指導者が自分を理解し指導してくれるという実感		
体験を共有する仲間の存在		
職業選択肢の増加(2)	心理師としてのアイデンティティを形成し始める(1)	心理師の働き方を知る
	将来働きたい職業選択の機会になる(2)	将来働きたい領域の選択肢を増やせる
		心理師をやってみようと思える
困難を感じる指導者、要心理支援者との関係と実習環境(4)	コロナの影響(2)	見学実習の中止
		対面授業の中止
	スタッフ間の意見対立(1)	指導方針の違いを目の当たりにする
	仲間との関係性(2)	仲間とのやりづらさ
		思いのすれ違い
	実習指導者や教員からの望ましくない指導(3)	一方的な指導
		課題量の多さ
指示不足		
実習に対するネガティブな感情(2)	実習で表面化した学生の気持ち(2)	心理師になることへの不安
		他の実習生と自分を比較してしまう
	実習への準備不足を感じる(4)	教員・実習指導者とのやりとりの仕方がわからない
		身体的・精神的疲労
		知識や技術の不十分さ
	要心理支援者への関わり方がわからない	

4. 【困難を感じる指導者、要心理支援者との関係と実習環境】

学生は、《コロナの影響》で〈見学実習の中止〉、〈対面授業の中止〉となることが一部であったことで実習へのモチベーションや達成感が低下していた。具体的には、「一部の实習は見学実習が中止となり、(実習指導者に)大学に来てもらって講義を受けたが体験的な実習ではなかった」、「コロナがなければ、もっと行ける施設があったのでとても残念だった」、「コロナで事前指導の発表がオンラインになってモチベーションが下がった」、「コロナで実習も含めいろいろなことがオンラインになり、家にいることが増え、虚しさや焦りが出た」といった発言が認められた。

また、学生は、実習中に現場の心理職と他の専門職の〈指導方針の違いを目の当たりにする〉ことで《スタッフ間の意見対立》があることを知り他職種連携の難しさを実感していた。また、実習と一緒に参加した〈仲間とのやりづらさ〉や〈思いのすれ違い〉を感じる体験をしていた学生も存在していた。この他として、〈一方的な指導〉や〈課題量の多さ〉、〈指示不足〉といった《実習指導者や教員からの望ましくない指導》によって実習へのモチベーションを低めていた。具体的には、「心理職と他の専門職の意見が対立していると思った」、「もっとスムーズにしている(連携している)のかと思った」、「一緒に参加した実習生の発言が気になってやりづらかった」、「ペアの人(一緒に実習を行った学生)との関係が難しかった」、「調べたことを事前指導で発表したら、教員に間違いを指摘された」、「実習日誌とかさまざまな提出課題を作成しなければならなかったので自分の趣味の時間がとれなくて辛かった」、「提出物がテスト期間に重なっていて大変だった」、「いろいろなことがオンラインになってレポートや実習の書類提出がとても大変だった」、「提出書類のメ切をもっと早めに指示してもらえれば、もっと深く質問できたのと思った」、「指示の連絡が来るのが遅かった」、「書類とかレポートの書き方をもう少し詳しく教えてほしかった」といった発言が認められた。

5. 【実習に対するネガティブな感情】

学生は、心理実習の場で、自分が目指す公認心理師のモデル像として、現場で働く心理職と関わる。この関わりは、公認心理師を目指すモチベーションを高める働きがあるが、逆に、それまで抱いていた公認心理師という仕事の理想と現実のギャップを痛感し、自分の適性に疑問を感じ不安になる等、モチベーションを下げる要因ともなりうる。今回実習に参加した学生の中にも〈心理師になることへの不安〉を感じた学生が存在していた。また、〈他の実習生と自分を比較してしまう〉ことで自信を失い、モチベーションが下がる学生もいた。具体的には、「教育領域の実習で異性の子どもに関わることに消極的になってしまった自分がいた」、「実習に消極的になってしまって後からもっと深く掘り下げて学べばよかったと後悔した」、「レポートや発表を妥協したくないと思い、頑張っていたらモチベーションが揺らぎ、自分がダメになってしまいそうになった」、「実習を通して自分は心理師には向いていないのではという気持ちが出てきた」、「勉強がどんどん難しくなっている中、実習があって、自分は心理に向いていないのではと思って心が折れそうになった」

「事前指導・事後指導で周りの人の発表を見ていたらすごいなあと思って、少し自信を喪失してしまった」といった発言が認められた。

この他として、〈教員・実習指導者とのやりとりの仕方がわからない〉、〈要心理支援者への関わり方がわからない〉、〈知識や技術の不十分さ〉といった《実習への準備不足を感じる》ことで、モチベーションが下がる学生が存在していた。「自分の不勉強だったが、報連相の仕方に関して指導された」、「実習中どうやって動いたらいいかわからなかった」、「どうすればいいのだろうという漠然とした不安がずっとあった」、「私たちがこの大学で初めて心理実習を受ける学生だったので、この実習がどんな実習なのかイメージできず、とても不安だった」、「実習中、目の前の子への関わり方がよかったのか不安になった」、「実習が始まった頃、書類の書き方が全く分からず不安になった」、「理論とか専門用語について理解するのが難しかった」といった発言が認められた。

IV. 考 察

今回の結果について、研究モデルとした石川・内海（2016）の看護学生の臨地実習のモチベーションに関する研究と比較してみたところ、カテゴリは、【実習で得られた達成感】、【学生を支える周囲の人との実習環境】、【職業選択肢の増加】、【困難を感じる指導者、要心理支援者（患者）】、【実習に対するネガティブな感情】と同様であったが、一部のクラスターが異なる結果となった。具体的には、【困難を感じる指導者、要心理支援者との関係と実習環境】において、本研究では《コロナの影響》、《スタッフ間の意見対立》、《仲間との関係性》が新たに見出された。

実習のモチベーションを向上させる要因として、【実習で得られた達成感】の《人としての成長の機会》、《要支援者と関わる中での嬉しい体験》、《実習という学習過程を通じた達成感》、《ストレスへの対処法の獲得》、【学生を支える周囲の人と実習環境】の《コロナ禍における実習》、《学生が指導を受けやすい指導者》、《他者からの理解》、【職業選択肢の増加】の《心理師としてのアイデンティティを形成し始める》、《将来働きたい職業選択の機会になる》があることが明らかとなった。

また、実習へのモチベーションを低下させる要因として、上述した【困難を感じる指導者、要心理支援者との関係と実習環境】の《コロナの影響》、《スタッフ間の意見対立》、《仲間との関係性》に加えて《実習指導者や教員からの望ましくない指導》と、【実習に対するネガティブな感情】の《実習で表面化した学生の気持ち》、《実習への準備不足を感じる》があることが明らかとなった。これらの結果を踏まえた考察を述べていくこととする。

大学学部の公認心理師カリキュラムの1つである心理実習では、実習施設の見学と実習施設の心理職の講義を通して、主に公認心理師の『他職種連携・地域連携』および『職業倫理』を学ぶよう厚生労働省から指針が示されている。当大学では、心理職が職務に携わる教育、保健医療、福祉、産業・司法領域の主要5領域の実習先を確保している（教育領域においては見学と講義だけでなく、実際に児童生徒の関与観察も行っている）。

実習全体を通して学生は、要心理支援者である児童生徒や実習指導者との関わりを通してモチベーションが向上していた。要心理支援者から励ましや感謝の言葉をもらい、彼らのポジティブな変化を間近で見たことや、実習指導者の丁寧な関わりが大きく作用していたのであろう。

心理実習は学生にとって、将来、心理職として働く上での社会モデルの場とも言えよう。実習に取り組む中で学生は、「実際に実習に行ってみて心理師の働き方がわかった」、「自分の特性を活かして働いている姿が想像できた」と語る等、心理師としてのアイデンティティを形成し始めるきっかけとなり、将来の心理職としての自分をイメージすることにつながっていることが分かった。

今後の心理実習をよりよいものにしていくためには、今回の研究で得られた学生の実習へのモチベーションを低下させる要因について検討する必要がある。

まず、はじめに《コロナの影響》についてであるが、飯田ら（2021）は、北海道内の大学生909名を対象に行った調査で、対象学生の55%がストレスを抱え、そのうちの約17%は強いストレスによる気分・不安障害を伴っている可能性があることを示している。教員は対面授業に劣らないオンライン講義や実習の形式を構築することが急務であらう。

次に、《スタッフ間の意見対立》であるが、通常の大学学部における心理実習では、実習施設の見学と実習指導者による講義が中心であるが、先述した通り、当大学は教育領域の実習において、実際に児童生徒と関わる関与観察が含まれている。この時、実習指導者である公認心理師と教職員との話し合いの場を目にする、すなわち、他職種連携の実践を学ぶのである。このような実習は多くの大学では大学院で行われる。どの領域で働く公認心理師も他の専門職との意見調整がスムーズに行くことは少ない。よって、このような場を目にした後の学部学生のフォローの仕方を実習指導者と教員が検討していく必要がある。

続いて《仲間との関係性》であるが、先述の教育領域の実習は二人一組で参加する形式であった。このことには、金井（2016）が理学療法士の実習教育を論じる中で述べているように、学生の精神的・対人関係・学習志向といった特性を十分考慮した対応をしていかねばならないだろう。

また、《実習指導者や教員からの望ましくない指導》であるが、本田（2019）や西村（2019）が保育実習のモチベーションに関する研究の中で、実習指導者との関係が不良な場合、学生のモチベーションが下がることを指摘している。今回の研究において、学生の一人が「先生方全員が言葉を選んでモチベーションが下がらないように接してくれていた」と語っていた。教員と実習指導者は、このことを強く意識し、学生の発言に対しては、主観的ではなく客観的、かつ学生がより実習に取り組めるようになるための発言を心がけていく必要があるだろう。

また、《実習で表面化した学生の気持ち》と《実習への準備不足を感じる》であるが、木下・八代（2016）の看護学生の臨床実習で体験する倫理的ジレンマに関する研究の中で、学生が学内で学んだことと臨床現場での実際の対応にギャップがあることや学生自身の知

識不足からジレンマに陥ることを指摘している。このことに対しては、木下・八代（2016）が考察で述べている通り、実習スタッフ（実習指導者）と教員が、学生が話しやすい環境を作り、彼らが多面的に考えられるような策を講じる必要があるだろう。

学生が心理実習の場をどれだけ有意義に過ごせるかは、学生自身の実習に取り組む姿勢はもちろんのこと、実習内容を如何に充実させるかも大きな要因の1つとなる。実習内容を充実させることは、今後いっそう社会からの要請が増えていくことが確実視されている公認心理師の人材育成とその発展につながる。大学教員と実習指導者はこのことを強く意識して実習内容の更新を進めていく必要があるだろう。

しかし、実習を受け入れる現場は、日々の業務に加えて、実習準備や指導のための勤務変更、実習指導中の業務代行等、実習指導者の負担が大きい。大学教員はこのことをふまえて実習指導者の負担を出来る限り減らす効率的な実習指導案を検討していく必要があるだろう。

また、今回は当大学での初めての心理実習であったため、実習に関する様々な面で段取りの悪さがあったことは否めない。学生からの声を真摯に受け止め、早急に対応していく必要がある。

本研究では、調査を実施する期間に制約があり、学生が医療領域での実習を体験する前に面接調査を行った。心理実習において医療領域での実習が必須となっていることを踏まえると、今後は医療領域での実習経験を含めたデータを収集し、分析を行う必要がある。

今後も同様のデータを継続的に収集し、そこで得られた結果を元に、坂田（2010）や佐藤・樋口（2016）がそれぞれ教育実習、精神看護学実習前の学生の不安をターゲットにした認知行動療法の関わり等を参考にしながら、当大学学部学生の心理実習へのモチベーションの維持・向上を促す実習プログラムを開発していく予定である。

大学における公認心理師養成教育はまだ始まったばかりであるため、心理実習のモチベーションに関する先行研究が存在していなかった。そのため、本研究では、すでに研究が行われている看護師、保育士、理学療法士の文献を引用して考察を論じた。

V. 結 論

心理実習は学生にとって、成長の機会、職業選択の機会となり、将来の自身の公認心理師像をイメージするきっかけとなっていた。また、昨今のコロナ禍のために一部の学外施設での実習ができない状況において、実習ができた喜びを感じモチベーションが向上した学生と、一部の実習に行けないことを残念に思いモチベーションを落とす学生の両方が存在していた。教員と実習指導者は、どのような実習環境においても、学生のモチベーションが下がらない関わりを強く心がける必要がある。そのためには、実習環境を整えるとともに、学生の実習へのモチベーションが維持・向上するためのプログラム構築の必要があると考える。

VI. 謝 辞

本研究のインタビューにご協力くださいました学生の皆様に厚く御礼申し上げます。また、本研究は日本心理臨床学会第40回大会（オンライン）で発表した内容に加筆したものである。ご意見、ご助言をくださいました先生方に厚く御礼申し上げます。

VII. 引用文献

- 本田由衣（2019）. 保育実習 I における学生の「モチベーション」について. 武蔵野短期大学研究紀要, 33, 11-18.
- 飯田昭人・水野君平・入江智也・西村貴之・川崎直樹・斉藤美香（2021）. 新型コロナウイルス感染拡大が大学生に及ぼす影響（第1報）—北海道内の大学への調査結果から. 北翔大学生涯スポーツ学部研究紀要, 12, 147-158.
- 石川恵子・内海桃絵（2016）. 看護学生における臨地実習へのモチベーション. 健康科学, 11, 11-16.
- 金井敏男（2016）. 学生の特性をふまえた卒前教育の実践—学内教育と臨床実習教育のあり方を考える. 長野保健医療大学紀要, 1, 23-37.
- 木下天翔・八代利香（2016）. 看護学生が臨床実習で体験する倫理的ジレンマ. 日本看護倫理学会誌, 8 (1), 39-47.
- 西村重喜（2019）. 保育実習におけるモチベーション変動について—モチベーションを変動させる要因の分析. 豊岡短期大学論集, 15, 37-46.
- 坂田和子（2010）. 教育実習への不安に対する認知行動療法. 福岡女学院大学紀要 人間関係学部編, 11, 1-5.
- 佐藤史教・樋口日出子（2016）. 看護学生の精神看護学実習に対する不安への認知行動療法に基づくオリエンテーションの効果. 岩手県立大学看護学部紀要, 18, 1-17.